

DOJIN  
R18  
成人向け  
18歳未満の  
購入・閲覧禁止

# ヌ メ コ レ ビ デ オ ガ ル ル PM





## あらすじ

今日もいつも通り朝から彼女たちに求められる。

橙にその小さな口で  
朝勃ちを処理してもらったり。

藍の胸に精液を溜めてもらい  
そのまま過ごしてもらったり。

紫へ服の上から精液を浴びせ  
体中匂いを染み込ませたまま出かけてもらったり。

そんな彼女たちの愛に応えつつ  
いつもと何も変わらない  
ごく普通な日の午後がまた始まる。





茂みに連れ込まれ  
流れるように  
戯れた後

暖かい口の中へ  
精を吐き出す



愛おしそうに  
ゆっくり、ゆっくりと  
自らの喉に白い汚れを  
受け入れていく



ふふ……  
溺れるかと  
思ったぞ？

まだまだ  
元気なあ？

欲望に汚された  
赤い口内をちらちらと  
見せつけながら

すぐに回復の兆しを  
見せてきた  
愚息を撫でられる

……正直  
午前中だけで  
倒れそうだったのに

お昼ご飯回りから  
急に元気になった気が  
するんですが  
何か心当たりは？

んー？

そりゃ  
一服盛ったからな

そんな  
悪びれもなく

だからいつも  
言っているだろう

お前も一服  
盛り返しても  
いいんだぞー？


睡眠薬だっけ  
渡してるんだし

……


そういう  
ことではない、と  
無言の抗議を行うように

藍の膨やかな胸に  
手を伸ばし  
上から遠慮なく  
揉みしだく

人里に  
辿り着くまでの道中  
しばし柔らかなさと  
小さな嬌声を  
楽しませてもらった



人里に着くと  
袖を揺らしながら伸びる  
白い腕がこちらの  
腕へと絡みつき




ムニユ


伴侶を誇示するかの如く  
見せつけるように身体を  
密着させてくる



PM 14:01



この程度の  
スキンシップには  
慣れたもので



周囲の目は  
もうさほど  
気にならなくなった



大妖怪に対する  
畏怖の視線

よその  
外来人に対する  
嫌悪の視線

睦まじさに対する  
嫉妬の視線

妖怪と人間の  
組み合わせに対する  
憐れみの視線



そんなことは彼女らを  
愛し、生き、死ぬ事に  
覚悟を決めたその日から

些細な事でしかない



様々な  
ドロドロとした  
いくつもの  
目が纏わりつくが――



だが彼女は  
そんな心中など  
気にも留めず





意地の悪いことに  
買い物中

藍は時折  
ちらりとこちらへ  
口内を見せつけてくる

口内には  
先程の精液が  
まだ残っており

里を練り歩く時も  
店主とやりとり  
している時も

藍はずっと  
残した精液の味を  
楽しみつ

日常の最中でも  
性行為の残滓を  
口の中で胎動させ  
舌の上で転がしているのだ

絶え間なく  
藍を汚しているという  
背徳感と征服感を  
じわりじわりと刺激され

思わず前かがみに  
なりそうになるの  
見つめられた笑顔で

日用品や食料などの  
買い物を済ませ  
家路へとつく途中

藍様に引っ張られ  
裏路地へと  
連れられていく

PM 14:55

あまり目を  
合わせたくない  
風貌の者が  
多くなつていくが

彼らも  
ただの人間で

彼らからしたら  
大妖怪こそ  
目を合わせたくない  
存在だろう

そそくさと  
隠れるように  
道を開けてくれた

向かう先は  
長屋の一室で

小さな建物だが  
暖簾がかかっている事から  
何かの商店だろう

PM 14:58

店の中は  
女性の好みそうな香が  
下品なほど焚かれており

店主と思わしき人物が  
店の奥で鎮座している

店内には春画を始めとした  
書物や鞭、ロウソク  
男性器を模した張型などが  
大量に陳列されていた

邪魔するよ

どうやらここは  
夜のお供に  
使用する物を  
取り扱ってるようで

雰囲気の違いはあれど  
「大人の書店」  
というやつだろうか



店主と思わしき人物と  
商談を始める彼女に



逆だよ  
私がここに  
卸してるのさ

なんと



「私に盛った薬も  
ここに？」

と少し  
嫌味ったらしく  
聞くと



副作用でも  
あったらどうする？

盛るのにも躊躇して  
欲しかったなあ

そんな  
誰が作ったかも分からない  
得体の知れないモノを  
大切な伴侶には  
飲ますわけには  
いかないだろう？

商談が終わるまで  
ぼーっと店内を  
眺めていると

チーン

PM 15:19

キョロ

キョロ

しきりに  
辺りを気にしながら  
こっそりと

なにやら  
見知った顔が  
入店してきたのである

そわ

そわ

多分道中誰にも  
見つからなかつた事を  
安堵しているのだが  
大変心苦しいのだが

おやおや  
これはこれは  
妖夢殿ではないか

巡り合わせの  
悪さには  
心中お察しする





こんな張形よりも

イェッ ヴ



案外大胆なんだが

スッ...

助け舟を求めるところで  
こちらを見ているので  
そろそろ助けて  
あげようかと考えると



「本物」の方が  
断然良いぞ？

藍様に  
言いくるめられ  
二人で路地裏へと  
連れて行かれる

妖夢の方はというと  
既に恥ずかしさと  
期待を膨らませた面持ちで  
完全にスイツチを  
入れられているようだ

ならばと壁に手をつかせ  
可愛らしい尻を  
露わにさせる

PM 15:26

華奢な腰を乱暴に掴み  
妖夢の幼さが残る膣内へ  
息をあたがい挿入する

先程のやり取りで  
幾分か興奮していたのか  
ほとんど濡れた膣肉は  
異物の侵入を  
しっかりと歓迎してくれた



野外での行為に  
大きな声を出すまいと  
必死に抵抗する姿は  
とても健気で

嗜虐心に火が付き  
ついつい汚したくなり  
腰を打ち付ける力が増す

服を肌蹴させ  
外気で敏感になっている  
乳首を吸い上げると

可愛らしい嬌声が  
我慢の隙間から漏れる  
耳を楽しませてくれる

両足を抱え込み  
浮いた身体を  
壁に押し付けながら  
妖夢の膣内へ  
好き放題欲望を吐き出す

身体は  
快楽を否定するよう  
びくびくと震わせるが

それに反して膣内は  
白い汚れを全て受け入れようと  
きつく締め上げ  
降りてきた子宮口が  
逃すまいと吸いついてくる

膣内の胎動に身を焦がされ  
身体を預けるように  
力なくしがみつく妖夢を  
包み込むように支えてやる

行為の余韻を  
楽しんでいる最中

不意に  
抱きつく力が  
強くなったと思うと

藍様には  
聞こえないよう  
耳元で囁かれる

幽々子様も  
寂しがられて  
おられます

どうかまた  
お屋敷の方にも…

予定にはない  
突然の逢瀬では  
あったが

自分だけ  
寵愛を受けるのは  
不義理だと  
思っているのだろうか

そんな  
生真面目すぎる顔に  
口づけを最後に  
落としてやった

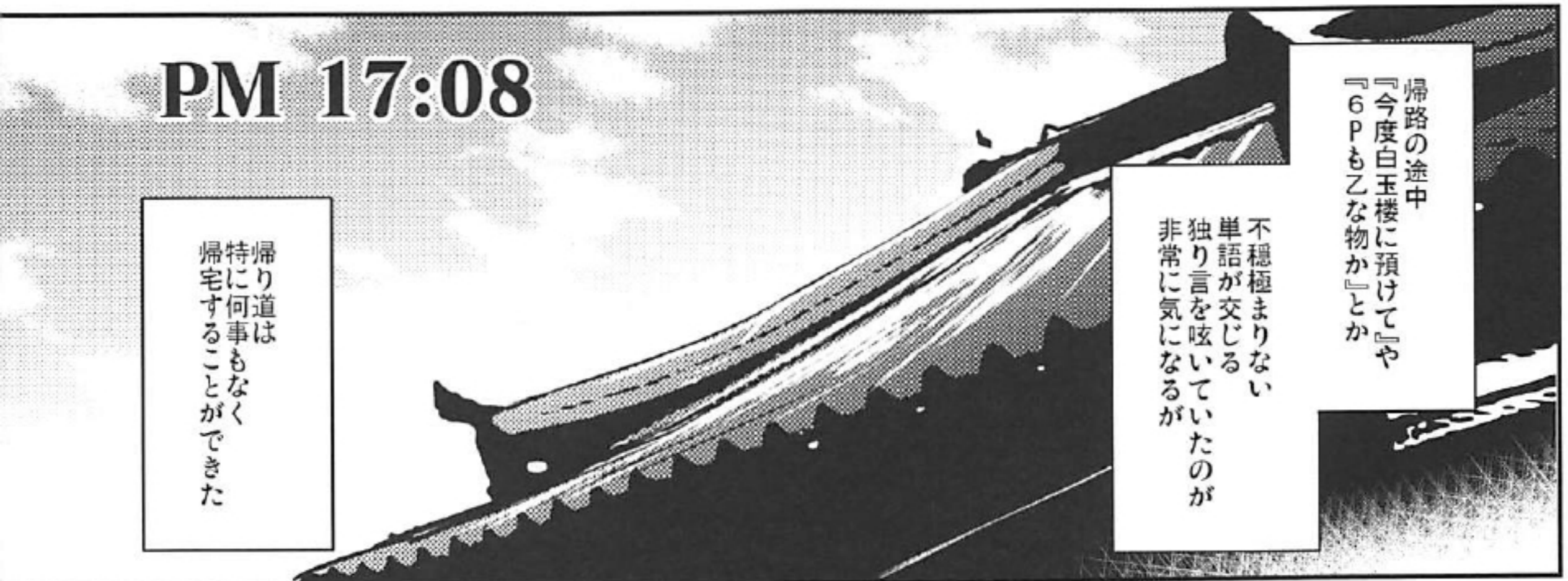
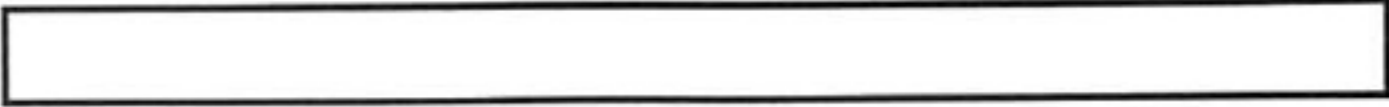


行為を最後まで見届けていた藍様は、実際に満足そうな顔を浮かべていた



身だしなみを整え、妖夢と別れる

PM 16:12



PM 17:08

帰り道は特に何事もなく帰宅することができた

不穏極まりない単語が交じる、独り言を呟いていたのが非常に気になるが

帰路の途中『今度白玉楼に預けて』や『6Pも乙な物か』とか



藍様はそのまま夕餉の準備へと向かってしまったので

夕餉まで時間を潰そうと自分の部屋へ戻ると






愛しい先客が  
帰りを迎えるように  
部屋の中から  
飛びついてきた



有無を言わず  
そのままくるんと  
半回転


部屋の中で  
何をしていたのかなど  
一聞きたいのだが





あつという間に  
予め敷いていた布団に  
押し倒され  
紫に伸し掛かれる

その顔は明らかに  
劣情を灯しており  
一刻も早くの  
愛し合いを求めて居た



ね……？  
い……？  
い……？

もう夜まで  
待ちきれないの……

PM 17:17

そのままごろんと  
身体を密着させ  
お互い布団に横たわる

しばらく豊かな身体を  
押し付けられながら  
見つめ合い  
どちらからとも言わず  
自然と唇が重なる

服の上から  
愚息を愛撫され  
『今は私から、ね』と  
声を我慢するよう命じられる

触れる肌から伝わる  
体温を味わいつつ  
紫の献身的な奉仕を  
堪能する

何度も  
快樂から漏れる  
情けない声を  
咎められつつも

紫の口内や  
顔、身体に欲望をぶちまけ  
夕餉前の  
小さな戯れを楽しむ





ああの……  
紫様……

あら……  
そろそろ  
お夕飯かしら？

PM 18:09

そんな中  
授乳プレイの現場を  
橙に目撃されてしまう

は……はい  
もうすぐだと……

妖怪だから実年齢は  
彼女の方が上だとか  
そもそも何十回も  
身体を重ねているとか  
そういうのは色々あるが

兎にも角にも  
幼い外見を持つ橙に  
赤子のよう乳を吸いながら  
手で抜いてもらっているのは  
成人男性の光景を見られるのは  
男の自尊心的に恥ずかしい





橙は最後までしっかりと  
欲望を受け止めて  
日頃の調教からか  
付着した残りの白濁液を  
丁寧に舐めとり始める



ふふ おっぱい吸いながら  
小さな子に  
お口でして貰うなんて

御飯前だって  
言うのに  
ひどい人だこと

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

夕餉や入浴を終え  
就寝と毎夜の営み目的で  
紫様の部屋へと足を運ぶ

もはや  
習慣と言える頻度で  
行われている事だが  
この時ばかりは  
いつも身体は緊張する

PM 20:14

部屋の中では  
気持ちを  
高揚させるような  
仄かな香の香りが漂い

寝間着に着替えた  
三人が布団の上で  
こちらの笑みと  
期待の眼差しを  
向けてくる

紫と藍にしなだれかかれ  
布団へと押し倒されると  
四つの柔らかさが  
愚息を襲う

たふん

たふ

頭の中が  
快樂の二文字で埋められ  
理性を飛ばし二人の胸だけを  
気が済むまで揉みしだき  
犯したくなるがぐっと堪える

あ

じゅ

二人の前戯は  
ねっとり続き

胸や顔を  
互いの唾液や先走り汁で  
汚しつんでも一心に  
楽しいようだった

たふ

たふ



たっぷり  
心地よい絶頂を  
迎えた後


欲望で埋め尽くされ  
溢れかえる紫の秘所から  
愚息を抜くと

さ……  
も……  
足開いて……

ほら……  
もう待ちきれなくて  
こんなになっ  
てるぞ……？

橙の幼いワレメは  
一目見ただけで  
愛しい人のモノを  
いつでも受け入れ  
準備が整っており  
られるよう

加担したであろう藍が  
唾液で光る橋を作りながら  
その成果を見せつけるように  
ワレメを指で開帳させている



情熱的に誘ってくる  
二人に覆いかぶさり  
遠慮なく  
まとめて肉欲を満たす

橙の精一杯  
受け入れようとする  
小さい膣内を  
無理矢理気味に犯し

藍の  
包み込んでくれるような  
とろとろした  
膣内を存分に堪能し

交互に腰を打ち付けながら  
遠慮なしに二人の  
膣内の感触の違いを  
楽しんでいく








最後に三人を並ばせ  
全てを  
屈服させるかの如く



彼女らの最奥へと  
存分に  
欲望を注ぎ込む



互いに満足し事を終え  
軽く睦言を  
交わしていると

紫の顔に  
近くに  
やかに  
嘸かれる

PM 23:59

ホッ

黙って  
私たち以外の娘に  
手を出すのは  
あまり好きじゃないの……

今度から  
幽々子達の所には……  
みんな一緒に  
行きましよう？

どうやら今日以上に  
愛し合う日が  
ありそうで

スケジュールは随時  
変更を検討しなければ  
ならないかもしれない

AM 0:00

# マヨヒガスケジュール PM

2017年 8月11日 初版発行  
コミックマーケット92

発行・制作

みどりねこ

みどり

<http://www.pixiv.net/member.php?id=76139>

midori0014@gmail.com

印刷

栄光印刷

謝辞

ZUN(上海アリス幻楽団)

みどりねし